

## 在村離農からみた健康管理

会 長 豊 田 文 一

在村離農という言葉は余り聞きなれない。社会学的にみれば現在の農村はこれに当てはまる。この言葉を準用すれば、過疎化の進んでいるへき地は、離村離農となる。富山県内の現実をみても廃村となった所も少なくなく、またそれに瀕している所もある。経済的にみてもその様相は、農家の農業依存度にもあらわれている。本県は全国的にみても、この点に関して顕著で、昭和45年度の依存度は全国平均36.5%に対し富山県は25.6%、昭和57年度のそれは、全国平均22.4%に対し11.8%の数値があげられている。このことは本県の兼業農家率96.8%と全国第1位であることが、その実態を如実に物語っている。

私は、関連する国際会議に数次にわたり参加した。農業に関する医学の濫觴は、東欧を中心としたヨーロッパとアメリカである。巨大農業に基づく医学で、農業医学(Agricultural Medicine)と呼称していた。しかし国際交流が緊密を加え、国際会議への日本の参加は、最近ではその参集者の過半数を超え、とくに“農夫症”を中心とする研究報告も多く、日本の提言によって農村保健(Rural Health)が加えられ、昨年ニュージーランドでもInternational Congress of Agricultural Medicine and Rural Health となっている。しかしここ数年来、かつては討議の中心課題の一つであった“農夫症”は影をひそめ

ている。臂力と畜力にたよった日本農業も、その近代化によって機械化し、その様相は欧米化されたといっても過言でなからう。しかし途上国では近代化が未だ道遠しの感があり、直接これを見る機会があった私の眼には、医学的調査はされていないように思われる。ただわが国では、全国土の18%にすぎない農耕可能地に、食糧の生産を求めている現状をみると、その自然環境と混住化する社会環境とがからみ合って特殊な状況が醸成されると思われる。ここにわが国の農村医学の特殊性があるのではなからうか。

昭和59年度の富山県農村医学研究会誌第16巻にもられた研究業績をみると、健康管理あるいは栄養問題も農村社会の過去から現在へのうつり変りの実態、また農業や農業機械による健康障害の研究も等閑視できない課題であり、さらに農村人口の高齢化に伴う社会医学的考察は、私どもとして看過できない課題である。

本研究会は創立以来17年を閲し、その間、国際会議においても日本農村医学会においても数多くの成果を発表された会員各位に深い敬意を表するものである。私は第16巻刊行にあたり、いささか見解の一端を述べ、今後の発展のためご活躍をお願いする次第である。